

日本川崎病研究センターニュースレター

(No. 44) 2022.8.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

ご報告

今田義夫

会員の皆様を初め、日本川崎病研究センターにご理解、ご協力をいただいているすべての方々に心からお礼申し上げます。

現在、新型コロナウイルス感染症は現在第7波とも言える流行中であり、流行終焉の兆しは残念ながら見受けられません。罹患年齢が当初とは異なり、若年者、特に子どもたちに及んでいるのも心配です。早く子どもたちが大声で遊ぶ姿が日常になることを祈りたいと思います。

原因が明白なコロナ感染も発生を抑え込むことが難しいことを考えると、原因の解らない川崎病の発生を抑えることの難しさを考えてしまいます。

さて、川崎先生のご命日を翌日に控えた6月4日、当センターの総会と研究報告会が昨年に引き続きオンライン方式で開催されましたので、簡単ですがご報告いたします。総会では、まず、昨年度の事業報告、会計報告、監査報告がなされ、さらに本年度の事業計画では例年と同じく、川崎病に関する相談事業、川崎病の教育・啓発活動、川崎病の疫学的研究、国際共同研究、公募による委託研究、学会開催支援などを継続することが承認されました。このうち、教育・研究活動として高橋理事により秋に「川崎病の病因と病態に関する研究会」として開

催が予定され、9月30日～10月1日には第42回日本川崎病学会が松原副理事長の元、開催され、シンポジウム「川崎病冠動脈病変の長期管理（仮題）」の共催を当センターが行う予定です。さらには9月3日にはAsia-Pacific Kawasaki Disease Associationの教育セミナーの開催に協力することが承認されました。

引き続き当研究センターの主要研究課題である研究事業として、中村理事から川崎病の疫学的研究が報告され、次いで4つの公募による委託研究の報告がなされました。今年度から単年度だけではなく複数年にわたる研究課題が容認されています。研究成果に期待大です。

次いで役員人事につきご報告いたします。2022年6月9日をもって、村松孝夫監事、菌部友良理事が退任されました。菌部氏には理事として、村松氏には監事として長く当センターに貢献されました。心よりお礼申し上げます。

今年度は9名の理事、1名の監事、3名の顧問の役員で運営させていただきます。改めて宜しく申し上げます。

今回のニュースレターには柳川洋先生、市田路子先生、田辺功氏にご寄稿戴きました。最後に、本年度は特に会員数の増加を目指しています。皆様にはご協力のほどお願い申し上げます。（当センター理事長）

重松先生、川崎先生と川崎病全国疫学調査 柳川洋



川崎先生と重松先生
2007年3月31日撮影

もう50年以上も前のことなので記憶は定かではありませんが、川崎富作先生がはじめて国立公衆衛生院（現国立保健医療科学院）疫学部長室に重松逸造先生を訪ねて来られたのは、1970年の2月でしたか、まだ寒い頃だったと思います。川崎先生が厚生省（当時）に川崎病（当時は、小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群といわれ、**MCLS**と略していた）の研究費を申請に行かれたとき、当時の厚生省科学技術参事官加倉井駿一先生に「疫学調査をされましたか？」、「重松逸造先生に相談しなさい！」といわれたためと伺っています。

そのことがきっかけとなって、疫学部として川崎病の研究に協力することになり、私のところにおはちが回ってきました。当時は野のものとも山のものともわからない川崎病のお手伝いすることには、あまり気が進みませんでした。私は、国立公衆衛生院疫学部に採用されて2年目の新米であり断ることもできず、なんとなく担当者に

されてしまったのが、川崎富作先生との出会いであり、その後の私の人生に大きな影響を及ぼした出来事でもあります。

1970年4月に「厚生省医療研究助成金による川崎病研究班」が発足し、重松逸造先生が中心になって、最初の川崎病全国疫学調査を実施しました。そのとき以来、現在まで半世紀にわたり途切れることなく、26回の調査が実施されました。

国立公衆衛生院在任中の1977年7月まで重松先生の下で調査を担当しました。自治医科大学への異動に伴って、第5回から第7回までの3回の調査は、当時の国立公衆衛生院疫学部柴田茂雄先生及び玉城英彦先生に担当をお願いしましたが、その後自治医科大学公衆衛生学教室が調査を担当することになりました。2000年以降は埼玉県立大学に異動したために後任の中村好一教授に調査の責任者をお願いし、現在に至っています。

この間、途切れることなく調査が実施できたのは、それぞれの施設でよき協力者を得ることができたからであります。国立公衆衛生院では、竹内和子さん、石川澄子さん、自治医科大学では、寺内由江さん、長谷川央子さん、屋代真弓さん、埼玉県立大学では川島美知子さんなどが本当によく協力をしてくださいました。いわば縁の下の力持ちという立場で、川崎病患者のデータベースを立派に守ってくださいました。特に屋代真弓さんには1985年以来34年間、17回に及ぶ全国調査の実質的な責任者として、患者データベースの維持・更新、調査の企画、医療機関への対応、データ処理、統計解析、報告書作成など、調査全般にわたって無理なお願いをしてきました。

この50年間にコンピュータを中心とする情報処理技術は著しい進歩を遂げました。第1回～第3回調査を実施したのは1970年代前半であり、そのころは80桁のパンチカードに穴をあけて、一箱2,000枚のケースに入った重いカードを幾箱ももって、民間のコンピュータ会社に通い、1時間数万円の使用料金を支払って、フォートランプログラムと格闘したものです。その後コンピュータは次々と世代が代わりましたが、1980年前半までは大型コンピュータの力を借りていました。第9回全国調査の頃からパソコンが急速に進歩して、ベーシック・プログラムはじめ各種のデータベース・アプリケーションを使って卓上で仕事ができるようになりました。過去50年間のデータ処理の流れを表にまとめてみました。

2021年、2022年受診患者を対象とした第27回全国疫学調査が2023年1月に実施される予定で、自治医科大学公

衆衛生学中村好一教授のご指導のもと牧野伸子教授、阿江竜介講師が調査の準備を進めていると伺っています。コロナ渦における川崎病患者の疫学像は、川崎病の原因究明に重要な手掛かりを与えるかもしれません。本調査を現在まで継続して実施できたのは、全国の小児科医の先生方の絶大なるご支援とご協力があったからであります。特に温かい支援とご指導をいただいた歴代の厚生省川崎病研究班長神前章雄先生、草川三治先生、川崎富作先生、加藤裕久先生、原田研介先生、また、本調査をいろいろな面から支えてくださった大川澄夫先生、菌部友良先生、今田義夫先生、麻生誠二郎先生ほか日赤医療センター小児科の諸先生、鴨下重彦先生、柳澤正義先生をはじめとする自治医科大学小児科の諸先生に感謝の意を表します。

(日本川崎病研究センター副理事長)

(表1)

川崎病全国疫学調査データ処理の流れ			
調査回	対象患者受診時期	データ処理の方法	集計
1-8回	1984年以前	80桁パンチカードによるデータ入力 FORTRAN IV (民間の大型コンピュータ レンタル)	FORTRAN IV
9-10回	1985-88年	DOS BASIC テキストデータ保存	DOS BASIC
11-12回	1989-92年	DbaseIII PLUS	DOS BASIC
13-15回	1993-98年	固定長テキストファイル (民間業者に入力委託) DbaseIII PLUS	DOS BASIC
16-18回	1999-2000年	CSV形式テキストファイル (民間業者に入力委託) Excel、Access	F-BASIC
19-25回	2005-18年	EXcel形式テキストファイル (民間業者に入力委託) Excel、Access	F-BASIC
26回	2019-20年	Excel形式テキストファイル (民間業者に入力委託) Excel、Access	Excel

川崎先生の思い出とアルバム

市田 露子

川崎先生への思い出は尽きません。

毎年、川崎病学会の折には、最前列に座られ、元気なお姿を拝見するのが楽しみでした（写真1）。



2009年5月には、富山大学医学部特別講演「現場から学ぶ：川崎病発見の経緯とその後の展開」をしていただきました。直接、発見当時の経緯やその後のご苦勞を川崎先生から伺うことができ、学生や医師に深い感銘を与えていただきました（写真2,3）。



翌日には、五箇山へのツアーにご参加いただき、堅豆腐とお蕎麦、おいしい日本酒を召し上がっていただきました（写真4,5）。



2012-02-07に京都で開催された川崎病シンポジウムでは、卒寿のお祝いをしました（写真6,7）。



2013.9に第33回日本川崎病学会を富山国際会議場で開催させていただきましたが、学生や研修医たちとも気さくにお話しいただき、彼らにとっては貴重な思い出になっています(写真8,9)。



富山松月での会食では、白エビなど、海の幸を堪能していただきました(写真10,11)。



2019年3月、私の退官に際して、ビデオメッセージをいただきました。

繰り返し、お声を聞いております。これが最後になりましたが、川崎先生の教えは、学生や医師の心にいつまでも残ることと思います(写真12)。



2019年3月

「退官おめでとうございます。。。。富山で第33回川崎病学術集会を開催された際には大変お世話になりありがとうございました。美味しいご馳走や温泉につかったことも良い思い出です。。。。機会があれば、また富山を訪れて先生若い先生たちと交流を深めたいと思います。

Happy retirement! 川崎富作」

(国際医療福祉大学山王病院小児科)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

ニュースレターNo.44お届けいたします。
ご意見ご感想をお寄せ下さい。

思い出す川崎病を取材した日々 田辺 功

① 溶連菌説に注目

私にとって川崎病は特別な思いのこもる病気です。お付き合いは前世紀、ずいぶんの昔のことになりました。スクラップをめぐりながら思い出しています。

私は1968年に朝日新聞に入社、76年12月に科学部の医学・医療担当となりました。すべての病気が取材対象でしたが、すぐに原因不明の病気・川崎病に引き込まれました。小児科の先生方を回り、注目したのは松見富士夫・自衛隊中央病院小児科部長らの溶連菌原因説で、患者を直接診察していた上野忠彦医師からいろいろ聞き出しました。

77年1月、厚生省（当時）の研究班会議で話したと聞いた翌日の紙面に「川崎病溶連菌が関係か」「菌体成分で中毒説」の見出しで紹介して以来、何度か書きました。川崎病は溶連菌が原因のしょうこう熱と似ているのですが、患者血液に溶連菌毒素に対する抗体がない、など幾つか決定的な相違点があります。日赤医療センター小児科の川崎富作医師はその違いに着目し、新しい病気として報告しました。川崎病を新しい病気とは思っていなかった松見先生は学会でも否定的な発言をし、川崎先生の反発を買っていました。そうしたいきさつもあり、川崎先生は溶連菌説には猛反対で、先生を重んじる医学界も溶連菌には冷たい対応でした。その壁を乗り越えようといくつもの証明実験を繰り返した上野医師らの溶連菌説は核心を突いている、と私は今でも思っています。

② 浅井隆君から親の会へ

心臓の血管がつまり、心筋こうそくの危険が高い場合、大人なら足の血管を移植するバイパス手術です。しかし、4歳の川崎病児、浅井隆君の血管は細すぎました。そこで東京女子医大の和田寿郎教授らは母親幸子さんの血管を移植しました。隆君は手術から約5カ月後の79年2月に亡くなり、私は「母の血管、心臓救う」に続いて「川崎病手術後に死んだ隆君」の記事も書かねばなりませんでした。

隆君の父親浅井満さんは、幸子さんの記録を元に82年1月、闘病記をまとめました。その反響は大きく、満さんを代表とする「川崎病の子供を持つ親の会」が9月に発足しました。機関紙「やまびこ通信」は

親たちの心の支えになっています。

③ 川崎病原因究明委員会

私は78、79年に心臓病の連載をしました。その取材で心臓病の啓発や研究助成をしている日本心臓財団と親しくなりました。私は子どもの心臓病の川崎病の急増、国の研究費が少なくて原因究明が進まないと事務局や理事に訴えました。

川崎病大流行の82年7月、財団は免疫学、細菌学、ウイルス学などの専門家から成る川崎病原因究明委員会を発足させました。研究費1000万円を出すとともに募金呼びかけ、原因研究運動を展開しました。委員長の重松逸造・放射線影響研究所理事長は「原因を3年以内に突きとめる」との決意を表明しました。委員会は約6500万円の一般募金もつぎ込みながら原因解明までいかず、結局、92年5月に解散しました。「10年の活動に終止符」の記事を書かざるを得なかったのは本当に残念でした。

④ 川崎病がわかる本と朝日賞

川崎病の報道ではよく心臓死が取り上げられ、若い両親は不安だったと思います。病気を分かりやすく解説した本がどうしても必要でした。東京女子医大第二病院小児科で川崎病に取り組み、心臓後遺症を予測する「浅井・草川のスコア表」を作った浅井利夫講師に私が協力して易しい表現でまとめたのが朝日福祉ガイドブック『川崎病がわかる本』でした。出版社が飛びつくほどではないので、朝日新聞の福祉事業を担当する厚生文化事業団から83年1月に出版しました。医師にも役立つよう厚生省の診断の手引きや全国調査、原因説や親の会活動、研究班や心臓財団原因究明委員会の名簿、川崎病の歴史なども加えました。初めての解説本として役立ったはずと自負しています。

朝日新聞と川崎病のもう1つのつながりは学術や芸術で傑出した業績の人に贈られる朝日賞です。89年度を受賞者に川崎先生が選ばれました。医学では生態物質や遺伝子の発見者ばかりで臨床医の受賞は例外的。選考委員の英断をうれしく感じました。

その川崎先生は20年6月に95歳の天寿を全うされ、親の会の浅井満さんも同年9月にお亡くなりになりました。冥福をお祈りするとともに川崎病解明の日が早く来ることを願っています。

（医療ジャーナリスト）

運動募金国民へ明解病崎



川崎病は主に、四、五歳までの乳幼児がかかる病気で、一部に心臓病が残る、町人に入らなければならぬと、研究費を二十万円を出資する。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。

特別委設けて研究者

川崎病は、四、五歳までの乳幼児がかかる病気で、一部に心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。

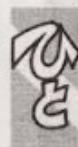
82.6.12

一口千円呼びかけ

心臓財団「国の研究費足りぬ」

母の血管、心臓救う 川崎病の子に移植手術

川崎病は、四、五歳までの乳幼児がかかる病気で、一部に心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。



溶連菌が関係か 菌体成分で中毒説

自衛隊病院の
松見部長報告

激増する「川崎病」の発見者

82.6.26

川崎病
富作



東京・海軍出身。25年、東京大学医学部卒業。昭和21年、自衛隊病院に勤務。船中から部長に就任。



川崎病に愛の手を!

分らないのかと云う。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。川崎病は、五、六歳の子供がかかる病気で、心臓病が残る。

事務局から

【センター日報】

2022 年 5 月 13 日 2022 年度第 1 回理事会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

2022 年 6 月 4 日 2022 年度総会と研究報告会開催（於:当センター） 1:00pm Zoom 会議

各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。

2022 年 6 月 4 日 2022 年度第 2 回理事会開催 総会後（於:当センター） Zoom 会議

2022 年 8 月 19 日 2022 年度公募研究選考委員会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

2022 年 8 月 19 日 2022 年度第 3 回理事会開催 5:30pm～（於:当センター） Zoom 会議

2023 年 3 月 10 日 2022 年度第 4 回理事会開催予定 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数】2022 年 7 月末現在

[正会員：71 名、1 法人、3 任意団体]：[賛助会員：97 名、1 法人、0 任意団体]

【学会・研究会・国際シンポジウム】

★ 第 46 回近畿川崎病研究会 2022 年 3 月 5 日（土）13:00～ 於：グランフロント大阪
運営委員長：津田悦子先生（国立循環器病研究センター小児科）

★ 第 43 回東海川崎病研究会 2023 年 5 月 20 日（土）開催予定
代表世話人：加藤太一先生（名古屋大学小児科）

★ 第 41 回関東川崎病研究会 2022 年 6 月 11 日（土） 於：日赤医療センター講堂
会頭：三浦大先生（東京都立小児総合医療センター）

★ 第 42 回日本川崎病学会 2022 年 9 月 30 日～10 月 1 日 於：大宮ソニックシティ
会頭：松原知代先生（獨協医科大学埼玉医療センター小児科）

★ 予定：第 14 回国際川崎病シンポジウム 2024 年 月 日 於：開催（カナダ）
会頭：Najib Dahdah, MD ・ Adriana Tremoulet, MD

★ 「川崎病の子供をもつ親の会」問い合わせ先：Tel：0467-55-5257

新会員募集にご協力ください！！

正会員 年会費 20,000 円

賛助会員 年会費 5,000 円

【川崎病に関するご相談】

専用アドレスを開設しました。<kdcentersoudan@gmail.com> 担当理事が、随時返信でお答えさせていただきます。電話・Fax によるご相談はご遠慮ください。

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター
〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階
Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124